

各ステージを結ぶ距離は、トータルで約2400km。その間6ステージで激走を誇る競技が展開。さあ、今からスタートだ!!



チャレンジャー：RE両宮自動車・両宮勇美(RX-7)/エスプリ・前川(シルビア)/HKS関西サービス・向井敏之(ランエボ)/ガレージ福井・横山耕治(MR2)/圭オフィス・北原慎一(シルビア)/トライアル・牧原道夫(GT-R)/ブリッツ・金子豊(セリカGT-FOUR)/マインズ・新倉通蔵(GT-R)/レイブロス・新波眞澄(スーブラ) 特別参加：OPTION・稲田大二郎(セリカGT-FOUR)&地元走り屋

Tuners' One

昭和56年にクルマの改造雑誌としてOPTIONが創刊された。巻頭の企画で超強行に日本列島激走キャンノンボールを実行。もちろん合法かどうかなんて関係ない、下北半島大間岬・下関・関門橋1800kmを22時間で走破(マシンは両宮チューンのSA22RX)だ。これは、その当時だったから成せた企画だったかもしれない。(創刊号が発売された後に、業界の内外に波瀾が及ぶ)。あれから

15年、その走り屋の夢が、今、形を変えて蘇った。チューニングカーというストリート・ロード・ゴーイングカーが社会的に認知され始めた現在、合法性さえ備えた、その名もチューナー'sキャンノンボール・ラン。ワン・ラップ・オブ・ジャパンが実現したのだ。本場USAのワン・ラップ・オブ・アメリカのノリで、オーストラリア・キャンノンボール・ランを経験したOPTのDaiがルートと競技を設定。5日間でラリー区間に設定されたルート約2400kmを走破。その間に、ジムカーナ(谷田部)、ヒルクライム(仙台ハイランド)、ゼロヨン(仙台ハイランド)、ドリフト(エビスサーキット)、サーキット・タイムアタック(ティーサーキット英田)、最高速(谷田部)と、6ステージをこなす。これは、速さにプラス、耐久性も重視され、マシンとドライバーの総合的なバランスの高さが、合法キャンノンボールを制するキーポイントになる。ドライバーはもちろんタフでなきゃダメ、マシンは速いことが基本。でも、クルマが壊れたらオシマイ!

この2000号突破記念プロジェクトに果敢に挑戦してくれたドライバーは、Daiのオーストラリア・キャンノンボール・ラン参戦に協賛していただいたチューナー's面々。OPTION創刊キャンノンボールからのお付き合い、RX-7を駆るご存じ雨さんを筆頭に、エスプリチューンのS14シルビアで乗り込む前川勝。異色のランエボで挑戦のHKS関西サービス・向井敏之。ゼロヨン最高速仕様のMR2でGT-Rを力もめるガレージ福井の横山耕治。圭オフィスの北原慎一は足で勝負のS14シルビアで参加。トライアル・牧原道夫はバリチューンのGT-Rで勝ちぬけ。ブリッツの金子豊は、オーストラリアの大地を疾走したDaiのマシンと同等性能のセリカで日本版のキャンノンボール・ランにアタック。マインズ・新倉通蔵はOPチューンが基本のGT-Rで自社のチューニングコンセプトも同時にアピール。レイブロス・新波眞澄は、B18パワーのスーブラで他車をねじ伏せる勢い。

チューナー'sキャンノンボール・ランワン・ラップ・オブ・ジャパンレギュレーション

車両：ナンバー付きならなんでもOK。チューニング程度に制限なし。
メンテナンス：工具及び交換パーツは、あらかじめ車載してあるものを使用に限る。ただしT1サーキット、谷田部ステージのみ、安全を考慮し、車載以外のタイヤ交換を認める。
競技：各ステージでの獲得ポイント及びツーリング区間での加点減点ポイントを集計し、総合勝者及び総合順位を決定する。(加点減点ポイントの集計発表は次号で。表彰式は'95オートサロン会場にて)



スピード、ハンドリング、加速G、減速キャパシティ、コントロール・レスポンス、そしてリングランによる快適性及び耐久性が気持ちいい。東西2400km走破のマルチステージで、チューンドパワーの真価をバトル!